仙台市立病院医誌 **10**, 77-81, 1990

索引用語
長期入院妊婦
分娩前妊婦の意識調査
妊婦の分娩直前看護

長期入院妊婦の抱える問題点
アンケート調査結果より

柳　原　みずほ，佐々木　真　弓，鈴　木　ゆかり

1. はじめに

近年，産科医療のめざましい発展により，かつては困難とされてきたハイリスク妊婦の妊娠継続が可能となってきている。これに伴って，長期入院妊婦の増加という新たな問題も生じてきており，当院周産部においてもその例にもれない。そこで長期入院妊婦の現状と妊婦管理上の問題点を明らかにするためアンケート調査を行い，若干の検討を加えたので報告する。

2. 研究方法

昭和63年1月から平成元年7月迄に，周産部に30日以上継続して入院した妊婦20名を対象に，電話にて研究目的を告げ了解を得た上で，アンケート用紙（**表1**）を発送し，返信封筒による回答

表1　産科病棟において長期入院を経験した人の実態調査

1
① 結婚年月日：　　年　　月　　日
② 職業（　　），結婚，妊娠にて退職した人は，その年月日：　　年　　月　　日
③ 家族構成（同居家族は誰で，またその人の年齢）
④ 入院中，おもに家事を行ったのは誰か
⑤ 留守宅に手伝いにきてくれた人がいた場合書いて下しい。
誰が（　　）週 or 月（　　）回くらい

2　入院中心配に思ったことについて
① 入院中一番心配に思ったことについて簡単に書いて下さい。
② 家族について心配に思ったことを順に1.2.3番まで（　）の中に番号を付けて下さい。
（　）家族の食生活と健康
（　）家の掃除，洗濯
（　）上の子の育児
（　）同居人に老人や病人がいた場合，その人の世話
（　）入院していることに対しての家族への気がね，その場合誰に対してですか（　　）
（　）夫の性生活について
（　）その他（　　）
③ 職場について
②と同じように1-3番までつけて下さい。
（　）休業していることに対する職場の人への気がね
（　）残してきた仕事の心配
（　）職場復帰できるかの不安
（　）その他（　　）

仙台市立病院周産部

Presented by Medical*Online

表1 のつづき

④ 母体について

②と同じように1-3番までつけて下さい。

( ) いつ退院できるのか

( ) 妊娠による母体悪化の心配

( ) 妊娠継続できるかどうか

( ) 正常な分娩が出来るか

( ) その他 (　　)

⑤ 胎児について

②と同じように1-3番までうけて下さい。

( ) 点滴や内服薬による胎児への影響

( ) 未熟児出産の心配

( ) 死産の心配

( ) 児は正常な発育をしているか

( ) その他 (　　)

3 入院中困ったことについて

① 入院中一番困ったことを簡単に書いて下さい。

② 入院生活で困ったことについて，順に1.2.3番までの( )の中に番号をつけて下さい。

( ) 同室者との人間関係

( ) 安静による苦痛

( ) 医療関係者との人間関係，それはどういう事ですか (　　)

( ) その他 (　　)

③ 安静による苦痛について（表3参照）

②と同じように1-3番までつけて下さい。

( ) 行動制限の苦痛

( ) ベット上，あるいはベットわきでの排泄に対する苦痛

( ) 清潔面での不快感

( ) 点滴による苦痛

( ) その他 (　　)

4 入院中励みになったことについて，順に1.2.3番まで ( ) の中に番号をつけて下さい。

( ) 家族の面会や励まし

( ) 友人の面会や励まし

( ) 同室者の励まし

( ) 医者の励まし

( ) 助産婦の励まし

( ) 同じ病気で，出産した人からの励まし

( ) その他 (　　)

5 入院への不安，葛藤から安定してきた時期は，入院してどのくらいからですか。

6 面会者について

① 主な面会者は誰で，どのくらいの間隔で面会にきましたか。

誰 (　　) で，週 or 月 ( ) 回ぐらい

② 自分の希望では，一番，誰に，どのくらい来てほしかったですか。

誰 (　　) で，週 or 月 ( ) 回ぐらい

7 一番の相談相手は誰でしたか。

① 母体，児について (　　)

② 家族の問題について (　　)

8 入院中，家族の人が一番困ったことはなんですか。

御協力ありがとうございました。今後の看護に役立てたいと思います。

Presented by Medical*Online

を依頼した。

3. 研究結果

対象妊婦の疾患名は**表2**に示すように20名中切迫流早産が12名と最も多く，うち4名は妊娠中毒症，3名は子宮筋腫を合併していた。平均入院日数は51.4日間で，最短30日，最長は切迫早産と子宮筋腫を合併した142日で対象妊婦20名中初産婦は15名，経産婦は5名で，教師1名を除く19名が専業主婦であった。家族構成は単核家族が13名(65%)，夫婦と子供のみの家族が3名(15%)，夫の両親と同居が3名(15%)，実の両親と同居が1名(5%)であった。単核家族が20名中13名を占めるため，妊婦入院中の家事を主に行ったのは11名までが夫であった。

また両親と同居の家族では，家族内の女性が家事を行っており，夫婦と子供の家族の3名中2名は妊婦の実母がその仕事を行っていた。入院中残された家族が一番困ったこととして，ほとんどの人が家事をあげており，主婦である妊婦が入院することによる家族への影響が大きいことがうかがわれた。

表2 アンケート対象症例

			疾患名	入院日数	職業	安静度
No. 1	25歳	0妊0産	妊娠29週切迫早産	48	無	B
2	30歳	1妊0産	妊娠5週子宮筋腫合併	53	無	B
3	27歳	0妊0産	妊娠31週 PROM，切迫早産	40	無	B
4	29歳	0妊0産	妊娠16週子宮筋腫会併	142	教員	B
5	27歳	1妊1産	妊娠15週切迫流産，リガツール OP	33	無	B
6	37歳	3妊3産	妊娠23週切迫流産	38	無	B
7	26歳	0妊0産	妊娠28週妊娠中毒症，IUGR	55	無	B
8	26歳	1妊1産	妊娠31週妊娠中毒症，切迫早産	32	無	B
9	23歳	0妊0産	妊娠33週前置胎盤	43	無	B
10	23歳	2妊2産	妊娠34週 DM 合併	31	無	B
11	23歳	0妊0産	妊娠12週妊娠悪阻，メニエル氏病疑い，切迫流産	30	無	B
12	28歳	0妊0産	妊娠31週双角子宮，IUGR, BEL	58	無	B
13	32歳	0妊0産	妊娠30週妊娠中毒症，双胎，バゼドウ氏病	44	無	B
14	27歳	0妊0産	妊娠29週切迫早産，リガツール OP	64	無	B
15	33歳	0妊0産	妊娠12週切迫流産	36	無	B
16	39歳	0妊0産	妊娠29週切迫早産，子宮筋腫合併	71	無	B
17	26歳	0妊0産	妊娠33週 IUGR	43	無	B
18	29歳	0妊0産	妊娠28週切迫早産，妊娠中毒症	39	無	B
19	23歳	2妊1産	妊娠29週双胎，切迫早産	41	無	B
20	29歳	2妊0産	妊娠30週 PROM，切迫早産	36	無	B

表3 切迫流産指示—安静度

	A	B	C
食事	寝たまま食べる	起床して食べる	自分で下膳する
洗面	ベット上で介助	室内又は洗面所	室内又は洗面所
排泄	ベット上	トイレで行う	トイレで行う
面会	主治医又は婦長の許可	主治医又は婦長の許可	多少の制限
歩行	禁	介助で行わせる	自分又は美容室で行う
シャワー	禁	禁	可

Presented by Medical*Online

表4　入院中の心配事

経産婦（5名）		初産婦（15名）	
上の子供の育児	4名	無事出産できるか	6名
家　　事	2名	胎児の状態	5名
手伝い人のこと	2名	夫の仕事	3名
夫の仕事	1名	家　　事	1名
		そ の 他	2名

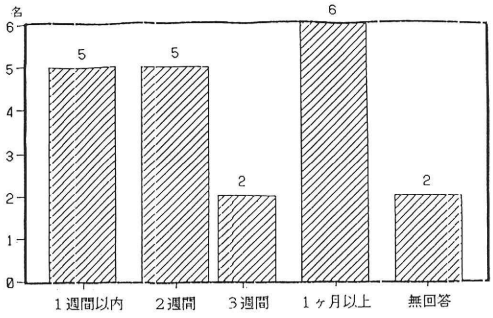

図1.　入院への不安葛藤から安定に至る期間

入院妊婦の最大の心配事は**表4**に示すように，初産婦では「無事出産できるか」であったのに対し，経産婦では「家に残してきた子供や家庭の事」と答える人が多かった。

入院中の苦痛としてあげられたものは，安静による行動制限が40%，点滴によるものが35%，清潔問題17.5%，排泄問題17.5%であった。

入院中励みになったこととしては，家族の面会や励ましが30%と1番多く，次いで医師や助産婦の励まし各20%，友人の面会や励まし15%，同室患者の励まし15%となっている。

面会人についてみてみると，夫が東京に単身赴任している1名を除いた19名では夫の面会が1番多く，週平均4.7回だった。

入院への不安葛藤から安定に至る期間は**図1**に示すように，1，2週間という短期間で安定してきたと答えた人も半数はいるが，1ヶ月以上要した人も6名と多く，双胎切迫早産で入院した1名は分娩まで不安があったと述べている。

4. 考　　察

入院期間について，塩沢ら[1]は「入院日数が30日を越えると，日数の増加にともなって神経症的傾向が増す」と報告している。一般内科疾患と異なり，産科においては長くても一応出産予定日までという目安がある点で多少性質を異にしているが，今回の調査では入院への不安，葛藤から安定に至る期間として，1ヶ月以上要したものが20名中6名もみられた。安斉[2]によれば，「欲求不満や葛藤は，誰にでも絶えず起こっている現象であるが，心理的に健全な状態であれば，これが巧みに処理され，過度に進行することはない」とされている。妊婦においては，自身の身体の事だけではなく，児を切望する心理も加わって精神的負担が増し，適応をむずかしくしているように思われる。

長期に渡る入院生活を送る妊婦にとって一番励みになったことは，深津[3]もいうように家族の面会や励ましであった。つぎには医師，助産婦の励ましがあげられているが，この結果をみても日常の診療，看護を通じて，医師，助産婦の言動は予想以上に大きな影響をもたらしているものと想像できる。医療人は常に言動に注意し，医学的立場からの支援のほか妊婦の母性意識の向上をうながし，快適な入院生活を送れるように努力する必要があろう。

妊婦が入院中，最も心配に思ったことについてみると，初産婦では無事出産できるかであったのに対し，経産婦ではそう答えた人は一人もおらず家族に関する心配事がほとんどであった。このことから経産婦は自分や胎児の事以上に，入院したことによって自分がいままで果たしてきた役割が果たせなくなることへの不安，心配があると思われた。初産婦でも夫の両親と同居している1名は，経産婦同様心配事として家族の事をあげている。初産婦であっても，主婦，嫁という2つの立場から，単核家族に比べて心理的負担が異なっている点が特徴的であった。

今回の調査結果から同じ様な疾患の妊婦といっても個々の妊婦のおかれている立場，役割を理解し，疾患の事だけでなく出来るだけ妊婦の相談に乗ったり，アドバイスを行う姿勢を持つことが必要と思われた。また，時には家族の理解，協力が得られるよう家族に対する援助を行う必要もある

Presented by Medical*Online

であろうう。

入院中の安静指示による行動制限に対する苦痛は，心理的負担や束縛感が主要のようであった。医学的知識を基に安静の必要を理解してもらうことが大切である。また，妊婦の束縛感を少しでも軽くするため，説明の仕方も「……出来ない」という否定的な表現ではなく，「……までは出来ますよ」という肯定的表現をするなどの配慮も大切であると思われた。

5. おわりに

20名と数少ない症例ではあるが，アンケートに寄せられた貴重な意見を基に，今回の研究を行った。今後は家族の理解，協力を得られるよう積極的に働きかける一方，本調査結果を長期間入院妊婦への看護援助に役立てたいと考えている。

今回の症例をまとめるに当たり，御協力頂いた方々に深く感謝する。

文　献

1) 塩沢洋子他著；内科病棟における情緒傷害の現状とその対策，第18回日本看護学会集録，成人分科会，1969
2) 安斉哲朗著；臨床場面における心理学，医学書院，1987
3) 深津　要著；心理学看護の体系論，メディカルフレンド社，1972
4) 長谷川弘著；看護のための臨床心理学，看護医学出版株式会社，1986
5) 三谷恵一，管　俊夫著；医療と看護の心理学，ナカニシヤ出版，1983
6) 岡堂哲雄著；看護教養心理学，金沢文庫，1976

Presented by Medical*Online